

長期療養中の小児悪性腫瘍患児の 心理的問題に関する研究

- ボランティア活動の役割と問題点の検討 -

岡村 純

要約 当施設の小児病棟において平成4年4月からスタートしたボランティア活動について、付き添いの親へのアンケート調査を行い、28名の母親から回答を得た。80%の母親は、遊んでもらったり、勉強を見てもらうことで「ボランティアにより患児の闘病生活に好ましい影響がでている」と考えていた。一方付き添いの母親自身についても「精神的に余裕ができ良い影響がでている」との答えが多かったもの(60%)、約半数の母親についてはまだボランティア活動が十分に受け入れられていない状態でありさらに活動の内容を検討していく必要があると考えられた。

見出し語：小児悪性腫瘍、入院生活、ボランティア活動、母親アンケート

1) はじめに

小児悪性腫瘍患児の大多数は、治療を目的として診断後数回にわたって合計3-4ヶ月間(再発した場合はそれ以上の期間)の入院生活を送ることになる。この間患児は単独でまたは付き添いの家族(ほとんどは母親)とともに病棟で過ごすことになるが、過去2年間の研究から、患児はこの期間に様々の精神的、心理的問題を抱えていることが分かった。平成5年に行ったアンケート調査によれば、治療の副作用による身体的ハンディキャップ(特に脱毛)や勉強の遅れに対するあせりなどがその中で最も重要なものであった。我々の施設には、カウンセラーや心理療法を専門とするパラメディカルスタッフがいないため、主治医や看護婦を中心とした医療スタッフが患児一人一人とできるだけ密なコミュニケーションをとるよう心がけてきたが、その他の活動として七夕会やクリスマス会などのイベントも企画し実施してきた。また平成6年4月からは、20年来の課題であった小学生のための院内学級が開設され入院患児の勉強意欲が飛躍的に向上している。また平成4年からは民間ボランティアグループによる病棟での活動が開始され効果を上げている。今回は3年を経過したこのボランティア活動の役割と現状での

問題点を分析した。

2) ボランティア活動の実状

イ) 活動開始の経緯

当科におけるボランティアの活動は、骨髄バンク運動にかかわってきたボランティアによる当科へのアプローチがきっかけで平成4年4月に誕生した。。その後九州大学教育学部学生による第2のグループによる活動も加わり人員が増加しているが、今回は主に前グループの活動について検討した。ボランティアの受け入れは当施設としても初めての試みであったため、活動の開始前には病棟婦長を含めた医療スタッフによる話し合いを行ったのち院長をはじめとする病院管理者や看護部などにその必要性などのついて説明し了解を得た。

ロ) 活動の実態

当科担当の医療ボランティア(第1のグループ)(グループ名;ワタリ西日本)は現在21名(うち男性2名)で構成され、2人-4人のグループ交代制をとっており、実質一人月2回-5回程度活動している。活動日は毎週土日(2-7pm)と平日1-2日(5:30-7:00pm)2時間(最低週1回)である。第2のグループ(九大学生、3人)は毎週水曜日のみ、3-4時間の活動である。活動内容は様々であり、

- 1.臨床活動
 - i)入院患者の相手-遊び相手、話相手、学習指導、雑用
 - ii)患者家族の相手-話相手、雑用
- 2.企画行事活動
 - i)クリスマス会などの行事の企画
 - ii)院外行事の計画、実施（野球観戦、遊園地行など）
 - iii)ゲスト訪問の企画
 - iv)資金、広報活動
- 3.研修学習活動...医師による学習、研究会（2-3ヶ月に一回）や事例研究会

などである。第1のグループによる活動は平成4年4月から6年10月までの30ヶ月間にのべ576人が274回活動し、1478人の患者と対応した。

なお過去2年間の問題点としては、定着率がオリエンテーション後1ヶ月で約50%、1年後で20%であり同グループの他施設での定着率（各々70-90%、50-60%）と比較して非常に悪かった。その理由としては 進学、就職（40%）、自信喪失（30%）、死亡退院などのストレス（10%）などがあげられていた。

3) ボランティア受け入れ側の反応

これまでのボランティア活動の成果や問題点を分析するためアンケートによる調査を行った。

イ) 方法

平成4年4月のボランティア活動開始後に入院し退院した患者家族および現在入院中の患者家族にアンケート用紙を直接配布して書き込んでもらった。28名の家族（全例が母親）から回答を得ることができた。

ロ) 結果（表1、2、3）

回答者（全例が母親）の年齢は20才代3名、30才代13名、40才代6名、無記入6名であった。患児の年齢は0-6才15名、7-12才6名、13才以上6名、不明1名であり、男女比は11：16（1名は無記入）であった。ボランティア活動については、28名中7名（25%）が以前からマスコミ（テレビ、ラジオ、新聞など）などを通じてその存在を知っていたが、残る21名（75%）は当施設に入院するまで知らなかったと答えた。活動の内容（表1、複数回答）については、

1. 子供と一緒に遊んでもらった
2. 勉強を見てもらった
3. 母親自身の話し相手になってもらった
4. 用事を依頼した

などであった。ボランティア活動の影響（効果）について検討したところ（表2）

1. 子供の気分転換になり明るくなった（8名）
 2. ボランティアが訪れる日を心待ちにしている（5名）
 3. 家族以外の人と楽しく遊ぶ習慣ができた（4名）
- などの効果が見られ、殆どの母親が「患児の闘病生活に良い影響を与えている」（80%）と考えていた。また付き添い家族に対する影響については、ボランティアが訪れることで

1. 精神的に余裕ができた（6名）
2. 自分の時間が持てて他の用事ができ良かった（5名）
3. 相談相手になってもらった（2名）

など自分たちの生活にも好影響を与えている（60%）と感じていた。しかし一部の母親からは、「かえって親の方が気を使う」「体調の悪いときなどはうるさいと感じることがある」などの回答があり、自分達自身に対するボランティアの積極的な効果を体験していないようであった（約40%）。その結果として、50%の母親は現在のボランティア活動に満足しているものの、残りの半数には十分にはその意義が受け入れられていないのではないかと思わせる（表3）アンケート結果であった。

またボランティアに対して

- 訪れる回数（日数）を増やして欲しい（特に面会人の少ない平日）
- 遊び方を研究してきて欲しい（遊びの種類、年令に合った方法）
- もっと勉強を見て欲しい（特に中学生）

などの要望事項が挙げられていた。

4) 考察

当施設においてボランティア運動がスタートしてから3年が経過した。ボランティアに携わる人々の積極的な努力により、その活動は患児や家族の間によく根ざしたものになりつつあると言える。他の家族から隔離されて長い間療養生活を強いられるため、不安や絶望に陥りやすい患児やその付き添い家族にとって、今や彼らの訪問や存在は不可欠のものとなりつつある。また当施設においては、当初から看護婦や他の医療スタッフとの間のトラブルは殆ど経験しておらず良い協力体制が作られてきたと言える。しかし今回のアンケートから、いくつかの考慮すべき点が存在することが判明した。それは患児の年齢や病状に合わせた活動内容の工夫や、付き添い家族に対する配慮などである。今後はこれらの点をボランティアグループとともに討論しながら改善してゆく必要があると考えられる。

表1 ボランティアに何をしてもらいましたか？

1.子供と一緒に遊ぶ	24名 (86%)
2.子供に勉強を教える	5 (18)
3.保護者の話し相手になる	5 (18)
4.ちょっとした用事を頼む	2 (7)
5.その他	1

表3 現在のボランティア活動について

1.非常に満足している	1	} 50%
2.満足している	13	
3.どちらでもない	12	43%
4.不満、不安な点がある	2	7%
5.非常に不満な点が多い	0	

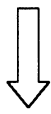
表2 ボランティア活動が及ぼす影響について

	子供の闘病生活 に対して	付き添いの保護者 に対して
1.非常に良い影響を与えている	5	0
2.良い影響を与えている	17	17 (61%)
3.どちらでもない	5 (19%)	10 (36%)
4.悪い影響を与えている	0	1
5.非常に悪い影響を与えている	0	0
(無回答)	(1)	



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 当施設の小児病棟において平成4年4月からスタートしたボランティア活動について、付き添いの親へのアンケート調査を行い、28名の母親から回答を得た。80%の母親は、遊んでもらったり、勉強を見てもらうことで「ボランティアにより患児の闘病生活に好ましい影響がでている」と考えていた。一方付き添いの母親自身についても「精神的に余裕がで良い影響がでている」との答えが多かったものの(60%)、約半数の母親についてはまだボランティア活動が十分に受け入れられていない状態でありさらに活動の内容を検討していく必要があると考えられた。